

2023 年度 横浜商科大学研究助成金 研究成果の概要

研究課題名 文学作品のリトールド版研究—作家達へのインタビュー分析に基づくリトールド版創作法と英語教育への応用
研究代表者 准教授 林 剛司

Graded Readers (以下 GR と記す) は、英語の読解力を向上させるための教材として、日本においても英語学習者の間でますます人気のあるツールとなっている。また GR を授業のテキストや多読用図書として導入する学校も増えているようである。GR の中でも特に文学作品のリトールド版 (原作を易しい英語で書き換えたもの) は、英米文学の世界へのよりアクセスしやすい入口であり、さらに言語面 (語彙、文法、構文等) で、これまで学習者達が学んできた英語 (学校英語、受験英語) との関連や相違点を提供してくれる。さらに、リトールド版を読むことにより、学習者は英語の言語面を学ぶだけでなく、英米文学の名作や英語圏文化についても理解を深めることができる。近年、英語教育における GR の活用が増加していることを受け、GR の中でも英米文学作品のリトールド版に焦点を当て、英語教育における GR の効果的活用法を提示することが本研究の目的である。

2023 年 8 月 30 日~2023 年 9 月 12 日、ニューヨークとボストンに滞在した。主たる目的は書店や大学図書館、公立図書館などで (英語を母語とする子どもが母語習得の過程で読む) Leveled Readers (LR) や (英語を外国語 or 第二言語として学ぶ人が読む) GR がどのように配置され、読まれ (売れ) ているのかを調査することであった。ニューヨークやボストンは英語を母語としない移民や学生が多いため、GR が多く配置 (販売) されているのかと思っていたが、GR を取り扱っている図書館や書店は殆ど無く、LR を見かけることが多く、書店の販売員に尋ねると、GR の需要はあまりない (あるいは存在すら知られていない) ことが判った。

GR や文学作品のリトールド版の作家たちにインタビューを行うことも本研究の目的の 1 つであった。作家たちの執筆動機や創作法を理解することは、彼らが英語学習者に何を期待し、学習者のためにどのような役割を果たそうとしているかを理解する上で非常に重要である。例えば、彼らが英語学習者に対してどのような言語的および文化的価値を提供したいと考えているか、彼らの作品によって英語学習者がどのように文学的知識や語彙力を向上させることができるか、などがわかるからである。これらの情報は、研究の主要な目的である、GR や文学作品のリトールド版が英語学習者の英語学習に与える影響を評価するために役に立つものであると考える。文学作品のリトールド版を執筆する作家達が創作の上で遭遇する課題を明らかにすることにより、リトールド版への理解を深めることができる。作家達が様々な工夫を凝らして執筆したリトールド版から、学習者は英語の言語面 (語彙、文法、構文、コロケーションなど) を学ぶことができる。また、作家達の制作意図や工夫、課題を明らかにすることで、学習者は英語の言語面を学ぶだけでなく、英米文学の名作や英語圏文化についても理解を深めることができる。そこで、国内外の GR、リトールド版の出版社数社と連絡を取り、リトールド版作家にインタビューが可能であるか尋ねた。これについては予想以上に難航を極めた。様々な理由があるのだが (各出版社との約束があり、理由の全ては公開できないが)、リトールド版作家の多くは出版社の専属ではない (様々な職を兼業しているフリーランスである) ため、連絡が取りにくいことと (そして多忙を極めていること)、出版社との間に様々な守秘義務が存在すること、が主な理由である。そのような中でも、インタビューに協力してもらった作家が 3 名見つかった。これらの作家は海外に住んでおり、質問紙を送り、それに回答してもらった形を提案し、了承を得た。ただ、インタビューの承諾を得ることができたのが 2023 年終盤に差し掛かろうとしていた頃であったことと、3 名ともかなりの数のリトールド版 (およびオリジナルの GR) を執筆しており、それら膨大な作品を読み、分析するだけで多大の時間を要した。したがってまだインタビュー実施には至っていないが、2024 年度中にインタビューを行いたいと考えている。

GR を取り入れた読み聞かせを通じて、国内で高度な英語力を身につけた親子 (日本人学習者) にインタビューをすることができた。GR には学習者を惹きつけるためのどのような工夫がなされているか、どのように GR を活用することによって英語力を向上させたかということを中心に、親と子どもの立場から体験談を伺った。現在、録音音声資料の文字起こしを行っているところである。

以上の成果と、さらに未完成の部分 (リトールド版作家へのインタビューと日本人学習者へのインタビュー) をまとめ、2024 年度内に学会での口頭発表あるいは論文の形で発表したいと考えている。